

問題訂正

・問題冊子

5ページ 9～10行目

(誤)・・・、無限の可能性に向かう」のだ、と。・・・

(正)・・・、無限の可能性に向かう」のだ、と。・・・

次の文章を読んで、後の問い(問一～問四)に答えなさい。

黄錦樹(一九六七)は、マレー半島の南端、ジョホール州のほぼ中央に位置するクルアン(Kluang) 中国語では居鑾)に生まれた。地元のクルアン中華中学(中学・高校に相当)を卒業後、台湾にわたり、台湾大学中文系で学士、淡江大学で修士、国立清華大学で博士の学位を取得、現在は、台湾南部の埔里にある暨南国際大学で教鞭を執っている。在学時代から活発な創作活動を展開、聯合報文学賞、中国時報文学賞など台湾の主要な文学賞を総なめにし、すでに小説集四冊、エッセー集一冊を上梓している。また創作の傍ら、文学研究や評論活動にも精力的に取り組み、四冊の評論集がある。いまや、マレーシア(注一)華人を代表する文学者の一人であると言ってよいだろう。

黄錦樹の祖父母が中国の南方、福建省の奥地から移民の群れに混じってクルアンの地に入植したのは、二〇世紀初頭のことであった。黄家は以来、二代にわたりゴム園を営み、ゴム園の収入を主要な収入源として生計を立ててきた。彼は「涙を流す樹」というエッセーに、ゴム園農家の日常を「天候への心配(雨が降ると樹液を採れない)や朝の早さ(陽が当たると粘ってしまう)から樹液を採るため樹皮に傷をつける時の力の入れ具合や採り残した樹液が発する悪臭、その悪臭がゴム園農家の人たちの体臭に浸みつくことに至るまで――丹精な筆致で綴っている。

このエッセーに記されている「華人とゴムの木は互いが互いの隠喩として、まさにぴったりである」(マレーシアのゴム園はイギリス植民地政府が原産地ブラジルからゴムの木をこっそり盗みだし移植したことに始まる)という語に惹かれて思ったのであるが、黄錦樹の記すゴムの木から樹液を採り出す熟練の手技は、まるで彼の華語創作における言葉の選択を想起させる。それは、黄錦樹の記す白話文がごく自然な母語として記された書き言葉ではなく、後日学んで身につけた華語(海外華人の用いる北京語の呼称)に基づく白話文だからである。黄錦樹のゴムの木に対する深い思い入れは、彼の華人としての意識、さらに華語への執着に重なるだろう。

ここでマレーシア華人の言語状況について簡単に触れておきたい。マレーシア華人のほとんどは、中国南方の福建省、広東

省、海南省からの移民である。彼らの話す中国語は、福建語、広東語、潮州語、客家語といった方言であるが、いずれも北京語との違いが甚だしく、北京語だけでなく、それぞれ方言間の理解も困難である。華語は、彼らの共通語として、また祖国への文化的象徴性を備えた言語として、学校で学び身につける言葉なのである。しかし、華語は北京語に基づく共通語ではあるが、ちょうど台湾の国語が北京語に基づきながら北京語とは微妙に異なる言語的特徴を持つように、おそろくマレーシア華人の華語も、北京語とは異なる体臭をすでに身につけているように思われる。大陸を代表する作家のひとりである王安憶（一九五四―）がマレーシアのジョホール・バルを訪れた際、接待した『星洲日報』支社の人々の話す華語が、彼女には「歌うような華語」に聞こえたという。王安憶が華語の発音に北京語のイントネーションを大きく逸脱する違和感を覚えたのは明らかである。筆者の考える黄錦樹の華語に対する執着というのは、このような差異を含む華語特有の体臭に対する執着である。

では、黄錦樹にとって、この華人特有の体臭を備えた華語、及び華語による白話文とは、どのような意味を持つのだろうか。まず考察の前提として、北京語による白話文の成立と、そのため南方方言を母語とする人たちに起こった困難について考えることから始めたい。

二〇世紀に入り、中国では清王朝が崩壊し、中華民国が成立した。それに伴い、王朝を支えた文言文が批判され、話し言葉に基づく白話文が堂々と用いられるようになった。これが五四白話文運動である。

この文言文から白話文へという変化は、貴族の言語から庶民の言語への転換であり、文字による文化を広く庶民に開放し、文化創造の階級差をなくすことが期待されていた。

確かに、民国以降の百年は、白話文の優位性が発揮される場面が少なくなく（抗日戦争などの大衆宣伝などにおいて）、演劇や大衆芸能などを含む口語や白話文による表現が、歴史上最も高い評価を勝ち得た時期でもあった。

しかし、思いがけない事態も明らかになった。それは、方言差による白話文の習熟度に差が生まれ、そこから白話文創作に優位に立つ者と劣位に立つ者との新たな差別が生じたのである。

文言文は、口語から切り離された書面語として発達し、膨大な文言文のストックを共有することにより、文言文での文化創

造に口語の方言差はほとんど影響しなかった。一方の白話文は、口語を書面語化したものである。民国時代の国語は北京語を基礎とし、白話文も当然北京語を基礎として書かれる。ゆえに北京語や北京語の属する北方方言を母語とする者は、母語(北方方言)の表現を生かした白話文を容易に書くことができる。北京生まれの作家老舍(一八九九—一九六六)の白話文の巧みさは、もちろん彼の言語感覚の鋭さにも拠るが、その「アプリオリな条件の良さ」に負っていると同じ作家仲間からは考えられていた。

しかし、福建語や広東語や客家語のように、北京語との相違があまりにも甚だしい南方方言を母語とする者にとって、母語(南方方言)は白話文の創作に何の役にも立たない。白話文の基礎となる北京語は、彼らには、同じ中国語と言ってもほとんど外国語に近い。彼らの書く白話文は、勢い母語以外の言語を学ぶようにして、技術的に身につけざるを得ないのである。

民国初年の文壇にフランス象徴主義の詩風をもたらした李金髮(一九〇〇—七六)は、広東省梅県出身の客家語を母語とする詩人であった。彼の書いた詩はその晦渋^{かいじゅう}さのゆえに多くの読者を戸惑わせた。しかし、当時、彼の詩が晦渋なのは、フランス象徴主義のゆえではなく、彼が北京語を話せず、まともな白話文を書けないからだと考えられていた。しかもこう考えたのは、朱自清(一八九八—一九四八)や卞之琳^{べんしりん}(一九一〇—二〇〇〇)といった二〇世紀を代表する中国の詩人であり、学者であった。さらに二人はともに相対的に北京語に近い江淮方言^{じゅうわい}や吳方言を母語とし、その後の長期にわたる北京滞在により方言の壁を克服して北京語を、つまり北京語による白話文を自家薬籠^{じかやくろう}中のものとしていた。彼らの李金髮に対する見方には、白話文に対する優位性からくる差別意識が、知らず知らずのうちに働いていた可能性は否定できない。

また、同じく広東省出身の小説家欧陽山(一九〇八—二〇〇〇)は、一九三〇年代の大衆文芸運動に呼応し、広東語による白話文の創作の場として「広州文芸」という新聞文芸欄を立ち上げた。彼がこの文芸欄を設けた理由の一つは、^(注2)「文学的素養の豊かな(特に本省(広東省)を離れたことのない)文学青年の多くが新文芸の創作に従事できないのは、彼らが精通する言葉(広東語)を用いることができず、書物から学んだ白話文を用いて書かざるをえないからであると思う」という点にあった。

つまり、広東語しか話せない者が、見よう見まねの白話文で創作するのは極めて困難であるため、広東語による広東語白話

文を用いた創作の場の確保が、広東語を母語とする人材の育成に不可欠であると考えたのである。

李金髪や歐陽山の直面した問題は、福建語（閩南語^{びんなん}）を母語とする黄錦樹にも共有されているであろうことは容易に想像がつく。しかも黄錦樹の場合、問題はさらに入り組んでいる。そこに華人としてのアイデンティティの問題が関わるからである。

マレーシア華人は、イギリス植民地時代から、華語による学校教育を重視してきた。しかし、一九五〇年代以降、特に五七年のマラヤ連邦独立以降は、マレー語中心の国民統合が推進され、華語教育は締め付けを受けるようになった。一九六一年に公布された教育法により、中学校は、公立の国民中学（国語〔マレー語〕）、国民型中学（英語及び私立の華文独立中学〔華語〕に三分され〔括弧内は各中学の教授用語〕）、政府の補助が打ち切られた華文独立中学は、華人社会の寄付金に頼らざるを得なくなる。六〇年代の華文独立中学は、経費、学生、教員、校舎の確保にも困難を抱え、多くの学校が学生の募集停止を余儀なくされた。しかし、七〇年代に入ると、華語教育に対する危機感から独立中学復興運動が起こり、以降、独立中学の在学生数は増加の一途をたどる。九〇年代以降は、中国の改革開放政策による急速な経済力の向上を背景として、マレーシア政府の華語教育に対する見直しが進み、多文化主義の名目のもと、華語教育が制度的に保障され、それまで認可されなかった華語中心の私立大学の設置も認められるようになった。

このようにマレーシア華人が華語教育にこだわり続けるのは、「華文中学は華人文化のとりで」⁽³⁾だと言われるように、「学校教育、新聞、雑誌などのメディアを通じてことばを覚えること、そして漢字の読み書きの能力を身につけることが、華人としてのアイデンティティを保証する」⁽³⁾からである。マレーシアの中国南方方言話者は、漢字と華語をマスターすることによって、新たに華人となるのである。

とするならば、華語が純粋な北京語ではなく、華人特有の体臭を持つことに対して、おおよそふたつの異なる反応が予想されよう。ひとつは、華語における北京語の純粋さの欠如が、純粋な「中国性」を永遠に追求させるよう働くことである。もうひとつは、純粋さの欠如した華語によってのみ可能な、マレーシア華人の「中国性」を新たに構築することである。

では、黄錦樹は、自身の華語により、どのようなアイデンティティを作りあげようとしているのか。彼は台湾で中国語（原

文「中文」、以下同じ)を媒介語とし文学の何たるかを知り、創作の筆を握るに至った自己を振り返りつつこう記している。「華人として記憶のなかで交響樂のように鳴り響いているのは華語であり、筆を下ろせば『華文』であることは免れない。それが故郷の情緒なのであるが、大中華の典雅な美学の憎む『美学の夾雑物』であることも免れない。」黄錦樹は、自分の書く文章が華語による華文であり、中国語の夾雑物であることを、ふたつの「免れない」という語を用い、それが、南方方言を母語とする華人が、望むと望まざるとに拘わらず、引き受けざるを得ない境遇なのだと言いきかせているように思える。彼の心中には、中国語の純粹美学に適った作品を物したいという願望が埋み火のように燃え続けているのかもしれない。しかし、彼にはそんな美的中国語が「甲羅をつけた」異形の姿に見えてしまう。一方の華語は、^{ふざつ}蕪雜で語彙が貧しく、どれほど言葉を費やしても意に叶わない。黄錦樹は、雅(中国語)と俗(華語)の狭間から抜け出せないまま、夾雑物である華語にひそむ可能性をこう記すしかない。一般に言語がそうであるように、⁽⁴⁾華語も「実践のなかで伸張し、その存在を引き延ばされ、無限の可能性に向かう」のだ、と。おそらく黄錦樹の華語コンプレックスは、昇華されることなく、彼の創作の原動力として存在し続けるだろう。

(松浦恆雄「黄錦樹の華語コンプレックス」二〇一一年より。本文は、黄錦樹『夢と豚と黎明——黄錦樹作品集』(人文書院刊)の解説として掲載された。出題の都合により、一部改変した箇所がある。)

(注1) 華人 中国大陆から海外に移住した移民、およびその子孫たちのうち、移住先の国籍を有するものを指す。

(注2) 「文学的素養の(……)と思う」(「」内は本文の筆者・松浦恆雄による補足である。)

問一 傍線部(1)について、本文全体での「華語」、「北京語」の説明として正しいものを次の選択肢からすべて選び、記号で答えなさい。

- (ア) 老舎が書く文章は、北京語とは異なる体臭を身につけている。
- (イ) マレーシア華人の華語とは、家庭で用いられる南方方言のことである。
- (ウ) 広東語の話者が見よう見まねの北京語の白話文で書くことと、マレーシア華人が華語で書くこととの間には類似した困難が見られる。

- (エ) 朱自清らの作家は、李金髮の詩が難解なのは彼が北京語を母語としないからだと考えていた。
- (オ) 広東語や華語で書かれた文章も、北京語で書かれた文章と同様に白話文と呼べると筆者は考えている。
- (カ) (ア)～(オ)の選択肢の中にあてはまるものはない。

問二 傍線部(2)について、「白話文の優位性が発揮される場面」の例として適切なものを次の選択肢からすべて選び、記号で答えなさい。

- (ア) 清末の中国における知識人が西洋の学術を学ぶうえで、日本語の書物を經由して知識を吸収したこと。
- (イ) 魯迅が『狂人日記』を執筆し、封建的な家族制度を批判したこと。
- (ウ) 中国の詩人が、日本人によって詠まれた漢詩を翻案して詩作をすること。
- (エ) 清末の思想家が民間歌謡のスタイルを発展させて、政治の腐敗を批判すること。
- (オ) 民国以降の庶民が文字によって自らの思想を表現すること。
- (カ) (ア)～(オ)の選択肢の中にあてはまるものはない。

問三 傍線部(3)について、「マレーシアの中国南方方言話者は、漢字と華語をマスターすることによって、新たに華人となる」とはどのようなことを意味しているか、本文の内容に即して二三〇字以内で説明しなさい。

問四 傍線部(4)について、「華語も『実践のなかで伸張し、その存在を引き延ばされ、無限の可能性に向かう』とは黄錦樹のどのような考えをあらわしているのか、本文全体の趣旨を踏まえて二〇〇字以上、二五〇字以内で説明しなさい。

Ⅱ

次の文章を読んで、後の問い(問一、問五)に答えなさい。

誕生日おめでとう、とわたしたちは言う。家族や友人に、ときにはその日初めて会った人にさえ、わりと気楽にこの言葉を差し向ける。しかしわたしたちは、この言葉でいったい何を祝っているのだろうか。そもそも誕生とは、どういうことなのか。

誕生とはまず、①生殖、すなわち、生物としてのヒトがおこなう繁殖行為の帰結としてあらたな個体が産みだされること、である。生殖はヒトにかぎらずどの生き物でもおこなうことであるが、ヒトのいのちは、唯一のわたしという個のかたちをとってあらわれる。同じヒトではあるが、わたしはあなたではなく、わたし以外のどんな人とも同じではなく、唯一のこのわたしとして生きるのであり、誕生とはその起点に位置する出来事、つまり、②唯一無二ユニークなの個のはじまりでもある。とはいえ、子どもは無人の荒野に生まれるのではなく、先に生まれていた人々のあいだに生まれ落ち、かれらが構成する社会の一員となる。わたしはわたしであってあなたたちとはちがう、とあなたたちに伝えることができるのも、あなたたちと同じ言葉を共にしているからである。このように人間の誕生には、③既存の社会への参入・所属、という要素がふくまれているのであるが、^①②と③の関係は緊張をはらみ、かならずしも調和的ではない。

子どもはユニークな個として生まれて来るが、親をはじめとする大人たちのほうは、自分たちがよいと思うやり方で育てようとする。たとえば、男の子だからとズボンをはかせ、怪獣やパトカーのおもちやを買ひ与え、今は腕白でよいけれど、大きくなったらしっかり勉強させて将来は立派な家の跡取りに、と期待を寄せるかもしれないが、当の子どものほうは、心のなかではピンクのスカートをはいて人形遊びがしたいと思っていて、やがて時がたち、わたしはほんとうは女性として生きたいのだ、と言い始めるかもしれない。そうしたときに、そうか、ならそうするのがいい、あなたの人生はあなたのものなのだから、と応答できる人間でありたいとわたしは思うし、それが社会全体としても理にかなった態度であると考えるが、いやそれは間違っている、そんなことを許したら社会は立ちゆかなくなってしまう、と考える人が少なくないことも承知している。誕生

生のうちにはらまれる、上記②と③という二つの要素のあいだの軋轢あつれきや衝突のうちに、個人の自由と共同体の秩序をめぐるソウコク、一般に政治とよばれるいとなみが生起する、と言つてよい。

そうした問題を回避する方法として、②の要素を消し去り、③に①をひきよせる、というやり方がある。^(b)セイミョウな組織を構成して種族の存続をはかるアリやシロアリのばあい、はたらきアリとして生まれた個体ははたらきアリとして生き、奴隷みたいに働くために生まれたんじゃない、だの、ミュージシャンになつてキリギリスと共演したい、だのと自己主張することはない(ように見える)。みながそのように個を滅却して全体に奉仕すれば、秩序のアンネイと種族の繁榮はゆるぎない——という発想は、人間族の歴史においてめずらしいものではないが、その極端な事例として、前世紀前半のドイツにあらわれたナチズムがある。その迫害の対象となつたユダヤ人の一人で、いのちからがら逃れたアメリカの地で政治思想家となつたH・アーレントは、⁽²⁾ナチスの全体主義国家を巨大なアリ塚にたとえてもいる。

全体に奉仕する忠良な国民を殖やすべく、ナチス体制下では多産がおおいに奨励されたが、殖えるべきは純血種の健康な個体でなければならぬとされた。ちようど家畜の繁殖と同じように、品種をそこなうとみなされた個体は除去の対象となり、やがて劣等とみなされた人々の大規模な殺害へと発展していくが、ヒトラーやヒムラーがしばしば用いたたとえによると、それは害虫の駆除や病原菌の根絶と同じことなのだという。家畜、あるいは害虫や病原菌、いずれにせよ人間は人間未満の生き物に引き下げられてしまうのであるが、同族をガス室につめこむような所業におよぶのはわが人間族を措いてなく、このようないくさは、他の生き物たちへの礼を欠くことになるかもしれない。

ナチスの猛威を生きのびたアーレントは、その暴虐を告発するいつぼう、⁽³⁾新しい政治のはじまりを、個のはじまりとしての人間の誕生にもとめる。その導き手となつたのは、古代ローマの哲学者アウグスティヌスの書にあらわれる、「はじまりが存在せんがために人間は創られた」という言葉である。創られた、とあるとおり、アウグスティヌスにとってこの言葉は、神による人間の創造というキリスト教の教えと結びあつてゐる。一人ひとりのいのちは神に与えられたものであり、たんなる生殖の所産ではなく、既存の社会への隷属を宿命づけられてもいない。言いかえれば、だれもが自由な個としてこの世に到来し、

自分だけの生の時間をぎざんでいくのであるが、アウグスティヌスにおいてこの自由は信仰のため、すなわち、欲得まみれの世俗社会に埋没した偽りの生から魂をひきはがし、神の愛へと向け変えるための自由としてある。しかしアーレントがもめたのは、この世に背をむけて信仰の道にひきこもる自由ではなく、世とともにする隣人たちを苦しめる社会の不正をただし、新しい世界をつくるための自由である。ゆえに彼女は、アウグスティヌスの言葉をいささか大胆に読み替えて、誕生というはじまりは、この世で人間が何かを始める自由のはじまりなのだ、と説く。だれもがユニークな個として、この世界で新しいことを「始めるために生まれて来る」のだ、というのである。国家にいのちを捧げ、敵を皆殺しにせよ、とせまる汚れて腐った大人たちに対して、いやだわたしはそんなことをするために生まれて来たんじゃない、とあらがう自由を守り抜くために。そんなことを許さない新しい世界をわたしたちはつくってゆくのだから、という希望の灯をともし続けるために。

自由と平和を言祝ぐ今日の社会は、戦争と虐殺に狂奔した前世紀の愚行と悲惨から、さしあたりとおく離れているように見える。ならばわたしたちは、子どもの誕生を、個のはじまりというその尊厳にふさわしいしかたで、祝うことができていくだろうか。

二〇一六年に政府が策定した「^(注)一億総活躍社会プラン」は、「二〇二五年までに希望出生率1・8」を達成することをうたう。

出生率の向上を、なぜ国策に掲げる必要があるのか。二〇二〇年五月策定の「^(d)少子化社会対策タイコウ」によれば、少子化の進行が、「労働供給の減少、将来の経済や市場規模の縮小、経済成長率の低下、地域・社会の担い手の減少、現役世代の負担の増加、行政サービスの水準の低下」などの弊害をもたらすから、である(内閣府HPより)。国全体の生産力(production)が低下しないように、労働力の再生産(生殖 reproduction)につとめねばならない、というわけであるが、なぜ生産力の低下に不安を感じるのか、といえば、今の社会のしくみが維持できなくなる恐れがあるから、である。税収が減り、ますます国の借金がかさみ、年金や社会保険が立ちゆかなくなり、わたしたちの老後があらゆるかもしれないから、である。(略)

国の都合や政府の思惑はどうあれ、国難を救うことを意図して子をもうける人は(おそらく)いないし、子どもたちが生まれて来るのは、社会の延命や大人の利益のためでは(けっして)ない。とはいえ、国の都合や政府の思惑がかくのごとしである以

上、子どもたちの誕生は、その一つひとつがユニークなはじまりであるがゆえに祝福されるのではなく、くずれかかったアリ塚をささえる労働力の供給としてカウントされてしまうことになる。⁽⁴⁾ 今やわたしたちは、誕生日おめでとう、などと気軽に口にすべきではないのかもしれない。

(森川輝一「誕生を祝うために」二〇二一年より。出題の都合により、一部改変した箇所がある。)

(注) 「二億総活躍社会プラン」「ニッポン一億総活躍プラン」が二〇一六年六月に閣議決定された。

問一 傍線部(a)～(d)のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線部(1)について、どうして「緊張をはら」むと考えられるのか、本文の内容に即して八〇字以内で説明しなさい。

問三 傍線部(2)について、アリ塚にたとえることで、ナチスの全体主義国家の性質はどのようなものとして理解できるのか、本文の「誕生」をめぐる議論を踏まえて二〇〇字以内で説明しなさい。

問四 傍線部(3)について、「新しい政治」においては個人と社会はどのようなものであるべきだと考えられているか、本文の内容に即して一四〇字以内で説明しなさい。

問五 傍線部(4)について、どうして「気軽に口にすべきではない」のか、本文の内容に即して一〇〇字以内で説明しなさい。

III

次の文章を読んで、後の問い(問一～問四)に答えなさい。

(注1) 鳥羽法皇の女房に、(注2) 小大進といふ歌詠みありけるが、待賢門院の御方に、御衣一重うせたりけるを負ひて、(注4) 北野にこもりて祭文(注5) かきてまもられるに、三日といふに神水をうちこぼしたりければ、検非違使、「これに過ぎたる失やあるべき。出で給へ」と申しけるを、小大進、泣く泣く申すやう、「おほやけの中のわたくしと申すはこれなり。今三日の暇をたべ。」(a) それに(注3) しなくは、われをぐしていでたまへ」とうちなきて申しければ、検非違使もあはれにおぼえて、のべたりけるほどに、小大進、

(b) 思ひいづやなき名たつ身はうかりきと現人神になりし昔を

とよみて、紅の薄様一重にかきて、御宝殿にをしたりける夜、法皇の御夢に、よにけだかくやんごとなき翁の、束帯にて御枕に立ちて、「やや」とおどろかしまいらせて、「われは北野右近の馬場の神にて侍り。めでたき事の侍る、御使給はりてみせ候はん」と申し給ふとおぼしめして、(注2) うちおどろかせ給ひて、「天神の見えさせ給へる、いかなることあるぞ。みてまいれ」とて、「御厩(注6) の御馬に、北面のものを乗せて馳せよ」と仰せられければ、馳せまいりて見るに、小大進は、あめしづくと泣きて候ひけり。御前に紅の薄様に書きたる歌を見て、これを取りてまいるほどに、いまだまいりもつかぬに、鳥羽殿の南殿の前(注6) に、かのうせたる御衣をかづきて、さきをば法師、あとをば敷島とて、待賢門院のさうしなりけるものかづきて、獅子を舞ひてまいりたりけるこそ、天神のあらたに歌にめでさせ給ひたりけると、めでたく尊く侍れ。則ち小大進をばめしけれども、か(注7) かるもんかうをおふも、心わろきものにおぼしめすやうのあればこそとて、やがて仁和寺なる所にこもり居てけり。(c) 力をも入れずしてと、古今集の序にかかれたるは、これらのたぐひにや侍らん。

(『古今著聞集』による)

(注1) 鳥羽法皇 第七四代天皇。在位一一〇七年—二三年。讓位後、二八年にわたって院政を敷いた。

(注2) 小大進 生没年未詳。平安時代後期の歌人。

(注3) 待賢門院 藤原璋子。一一〇一年—四五年。鳥羽天皇の皇后。

(注4) 北野 北野天満宮のこと。北野天神である菅原道真を祭る。

(注5) 祭文 神に告げる言葉。祭詞。

(注6) 鳥羽殿 京都市伏見区鳥羽にあつた離宮。

(注7) もんかう 責め咎めること。拷問に同じ。

問一 傍線部(1)(2)を、主語を明示して現代語訳しなさい。

問二 傍線部(a)の内容を具体的に説明しなさい。

問三 傍線部(b)の和歌を現代語訳しなさい。その際、現人神が誰に当たるかを明示すること。

問四 傍線部(c)は「力をも入れずして天地^{あめつち}を動かし、目に見えぬ鬼神^{おにかみ}をもあはれと思はせ、男女のなかをも和らげ、たけきもののふの心をもなぐさむるは歌なり」という古今和歌集仮名序の文章を引いた語り手の批評である。語り手はこの小大進の話をごのように考えているのか、本文全体を踏まえながら説明しなさい。